

チェビシェフ補間多項式による函数の逐次近似*

鳥居達生** 牧之内三郎**

We now consider to expand a "well-behaved" function over a finite range in a series of Chebyshev polynomials.

Doubling the number of interpolating points, Clenshaw has determined mechanically the degree 2^k and coefficients of a truncated Chebyshev series for the preassigned accuracy, without previous computed values of the function being wasted.

We refine the Clenshaw's method, and reduce the number of multiplications. If the degree N of that series is 2^k , calculation of all the coefficients requires about $N^2/12$ multiplications by combining the trapezoidal rule and the midpoint rule.

1. はじめに

区間 $[-1, 1]$ において有界変分で連続な函数 $f(x)$ のチェビシェフ級数は $f(x)$ に一様収束する。展開係数の計算には積分が必要であるが、ここでは極限操作は用いない。補間多項式によって $f(x)$ を近似する。 $f(x)$ が上の条件をみたすならば、チェビシェフ多項式の選点直交性を利用した補間多項式も $f(x)$ に収束する。

さて $f(x)$ をチェビシェフ展開して

$$f(x) = \frac{1}{2}a_0T_0(x) + a_1T_1(x) + a_2T_2(x) + \dots \tag{1a}$$

$$a_k = \frac{2}{\pi} \int_0^\pi f(\cos \theta) \cos k\theta d\theta \tag{1b}$$

$$T_k(x) = \cos(k \cos^{-1} x)$$

とする。チェビシェフ多項式の選点直交式は二つあるので、それぞれに応じて補間多項式をつくることができる。

第一に、選点直交式

$$\frac{2}{n} \sum_{k=1}^n T_r(x_k) T_s(x_k) = \begin{cases} 0, & s \neq 2mn \pm r, \\ (-1)^m, & s = 2mn \pm r, r \neq 0, n \\ (-1)^m \times 2, & s = 2mn \pm r, r = 0 \end{cases}$$

$$x_k = \cos \frac{2k-1}{2n} \pi$$

$$r = 0, 1, \dots, n; m = 0, 1, 2, \dots$$

より、 $n-1$ 次の補間多項式

$$\sum_{r=0}^{n-1} b_r T_r(x) \tag{2a}$$

$$b_r = \frac{2}{n} \sum_{k=1}^n T_r(x_k) f(x_k) \tag{2b}$$

が得られる。ここで \sum' は、第一項だけ $1/2$ 倍して和をとることを意味する。

第二に、選点直交式

$$\frac{2}{n} \sum_{k=0}^n T_r(x_k) T_s(x_k) = \begin{cases} 0, & s \neq 2mn \pm r \\ 1, & s = 2mn \pm r, r \neq 0, n \\ 2, & s = 2mn \pm r, r = 0, n \end{cases}$$

$$x_k = \cos \frac{k}{n} \pi$$

$$r = 0, 1, 2, \dots, n; m = 0, 1, 2, \dots$$

より n 次の補間多項式

$$\sum_{r=0}^n c_r T_r(x) \tag{3a}$$

$$c_r = \frac{2}{n} \sum_{k=0}^n T_r(x_k) f(x_k) \tag{3b}$$

が得られる。ここで \sum'' は、第一項と最後の項だけ $1/2$ 倍して和をとることを意味する。

定積分 (1b) と係数 b_r, c_r の計算式 (2b), (3b) の関係に注目する。角 $\theta = \cos^{-1} x$ に関し、(2b), (3b) は (1b) を、それぞれ中点則、梯形則によって求めたものに外ならないから、補間多項式 (2a) は中点則によるチェビシェフ補間多項式、(3a) は梯形則によるチェビシェフ補間多項式とよぶことができる。ここでは、それらを簡単に中点式、梯形式ということにする。

係数 b_r, c_r の近似度は、上に述べた二つの選点直交式より簡単に計算できて

* Successive Approximation for Functions by Chebyshev Expansion Making Double the Interpolation Points, by Tatsuo Torii and Saburo Makinouchi (Faculty of Engineering, Osaka University).

** 大阪大学工学部

$$b_r = a_r - (a_{2n-r} + a_{2n+r}) + (a_{4n-r} + a_{4n+r}) - \dots \quad (4)$$

$$c_r = a_r + (a_{2n-r} + a_{2n+r}) + (a_{4n-r} + a_{4n+r}) + \dots \quad (5)$$

となる。明らかに $\frac{1}{2}(b_r + c_r)$ は、チェビシェフ展開係数 a_r のより精確な近似値として使える¹⁾。 $2n$ 次の梯形式の係数を c_r' とすれば、(5) より

$$c_r' = a_r + (a_{4n-r} + a_{4n+r}) + (a_{8n-r} + a_{8n+r}) + \dots$$

r の代りに $2n-r$ とおけば

$$c'_{2n-r} = a_{2n-r} + a_{2n+r} + a_{6n-r} + a_{6n+r} + \dots$$

となる。ところで上の二式の右辺は、それぞれ $\frac{1}{2}(c_r + b_r)$, $\frac{1}{2}(c_r - b_r)$ と一致するので

$$\left. \begin{aligned} c_r' &= (c_r + b_r)/2 \\ c'_{2n-r} &= (c_r - b_r)/2, \quad r=0, 1, \dots, n-1 \\ c_n' &= c_n/2 \end{aligned} \right\} (6)$$

が成り立つ。この関係式を用いれば、次数が2のベキの梯形式は、中点式の計算を繰り返すことにより求められる。したがって中点式の計算法を改良することはとくに意味がある。

n が4の倍数ならば、 $n-1$ 次の中点式を約 $n^2/4$ 回の乗算で計算できることを後に示す。この結果として $n=2^m$ (m は任意の自然数) ならば、 n 次の梯形式を約 $n^2/12$ 回の乗算で求めることができる。同時に次数が $2^1, 2^2, \dots, 2^m$ の梯形式の列が得られるので、収束の状況がわかる。したがって、必要な精度に応じて近似式の次数を 2^m のきざみではあるが、機械的に決定できる。また $f(x)$ に関する数値的情報(補間点における函数値)は、梯形式の列をつくるのに、無駄なく使用される。

最近、 n (偶数) 次の梯形式を約 $n^2/4$ 回の乗算で求める方法が発表されている²⁾。

2. 漸化式によるある種の級数の計算法

チェビシェフ補間多項式の係数 b_r あるいは c_r を“簡単に”求めるための準備として、ある種の級数の計算法について述べる。

数列あるいは函数列 $\{u_k\}$ は三項漸化式

$$\left. \begin{aligned} a_k u_{k-1} + b_k u_k + c_k u_{k+1} &= 0 \\ a_k c_k &\neq 0, \quad k=2, 3, \dots, n-1 \end{aligned} \right\} (7a)$$

にしたがうものとする。さらに $\{u_k\}$ の初期条件を

$$\left. \begin{aligned} c_0 u_1 &= \eta_0 \\ b_1 u_1 + c_1 u_2 &= \eta_1 \end{aligned} \right\} (7b)$$

の形で与えることにする。

さて n 項の級数

$$S_n = \sum_{k=1}^n \gamma_k u_k \quad (8)$$

を漸化式を用いて計算しよう。

(7a), (7b), (8) を一つにまとめると

$$\begin{bmatrix} c_0 & & & & & & \eta_0 \\ b_1 & c_1 & & & & & \eta_1 \\ & a_2 & b_2 & c_2 & & & 0 \\ & & & & \ddots & & \\ 0 & & & & a_{n-1} & b_{n-1} & c_{n-1} \\ \gamma_1 & \gamma_2 & \dots & \gamma_{n-1} & \gamma_n & & S_n \end{bmatrix} \begin{bmatrix} u_1 \\ u_2 \\ \vdots \\ u_n \\ -1 \end{bmatrix} = 0$$

となる。この式は、係数行列の列ベクトルが一次従属と読める。したがって係数行列の行ベクトルも、また一次従属、すなわち適当に数列 $\{v_k\}$ をとると

$$\begin{bmatrix} c_0 & b_1 & a_2 & & & & \gamma_1 \\ & c_1 & b_2 & & & & \gamma_2 \\ & & & \ddots & & & \vdots \\ 0 & & c_2 & & a_{n-1} & & \gamma_{n-1} \\ & & & & & b_{n-1} & \gamma_n \\ \eta_0 & \eta_1 & 0 & \dots & 0 & & S_n \end{bmatrix} \begin{bmatrix} v_0 \\ v_1 \\ \vdots \\ v_{n-1} \\ -1 \end{bmatrix} = 0$$

と表わすことができる。これを漸化式の形にもどす。

最初の n 行から

$$\left. \begin{aligned} c_{k-1} v_{k-1} + b_k v_k + a_{k+1} v_{k+1} - \gamma_k &= 0 \\ v_{n+1} = v_n &= 0, \quad k=n, n-1, \dots, 1 \end{aligned} \right\} (9)$$

最後の行から

$$S_n = \eta_0 v_0 + \eta_1 v_1 \quad (10)$$

が得られる。

3. 中点則によるチェビシェフ補間多項式

中点式の係数 b_r の計算式(2b)において、補間点 x_k の対称性 $x_k = -x_{n-k+1}$ と $T_r(x_{n-k+1}) = (-1)^r T_r(x_k)$ に注目すれば、項数を半分に減らすことができ

$$b_r = \frac{2}{n} \sum_{k=1}^{n/2} T_r(x_k) \{f(x_k) + (-1)^r f(-x_k)\} \quad (11)$$

n ; 偶数.

$n-1$ 次の中点式の補間点は $2n$ 次の梯形式の補間点 x_k' ($k=0, 1, \dots, 2n$) に含まれるので、(11) を $\{x_k'\}$ を用いて書きあらためる。すなわち

$$\left. \begin{aligned} \frac{n}{2} b_r &= T_r(x_1') F_2 + T_r(x_3') F_4 + \dots \\ &+ T_r(x_{n-1}') F_n \\ r &= 0, 2, 4, \dots, n-2 \end{aligned} \right\} (12)$$

$$\left. \begin{aligned} \frac{n}{2}b_r &= T_r(x_1')F_1 + T_r(x_3')F_3 + \cdots \\ &\quad + T_r(x_{n-1}')F_{n-1} \\ r &= 1, 3, \dots, n-1 \end{aligned} \right\} \quad (13)$$

ただし $F_{2k} \equiv f(x'_{2k-1}) + f(-x'_{2k-1})$

$$F_{2k-1} \equiv f(x'_{2k-1}) - f(-x'_{2k-1})$$

n を 4 の倍数とすれば、偶数次の係数の計算式(12)の項数を半分に減らすことができる。 r が偶数のとき

$$T_r(x'_{n-2k+1}) = (-1)^{\frac{r}{2}} T_r(x'_{2k-1})$$

が成り立つことから、(12)の右辺は、次のように分けて書ける。

$$\left. \begin{aligned} \frac{n}{2}b_r &= T_r(x_1')F_4^* + T_r(x_3')F_8^* + \cdots \\ &\quad + T_r(x'_{\frac{n}{2}-1})F_n^* \\ r &= 0, 4, 8, \dots, n-4 \end{aligned} \right\} \quad (14)$$

$$\left. \begin{aligned} \frac{n}{2}b_r &= T_r(x_1')F_2^* + T_r(x_3')F_6^* + \cdots \\ &\quad + T_r(x'_{\frac{n}{2}-1})F_{n-2}^* \\ r &= 2, 6, 10, \dots, n-2 \end{aligned} \right\} \quad (15)$$

ただし $F_{4k}^* \equiv F_{2k} + F_{n-2k+2}$

$$F_{4k-2}^* \equiv F_{2k} - F_{n-2k+2}$$

つぎに奇数次の係数の計算式(13)について述べる。 r を偶数として

$$\bar{b}_r = \frac{1}{2}(b_{r-1} + b_{r+1}) \quad (16)$$

とおく。漸化式 $T_{r+1}(x) + T_{r-1}(x) = 2xT_r(x)$ と(13)より

$$\begin{aligned} \frac{n}{2}\bar{b}_r &= T_r(x_1')(x_1'F_1) + T_r(x_3')(x_3'F_3) \\ &\quad + \cdots + T_r(x'_{n-1})(x'_{n-1}F_{n-1}) \end{aligned}$$

が得られる。したがって、 $x_1'F_1$ を F_2 、 $x_3'F_3$ を F_4 、 \cdots と考えるならば、前述した偶数次の係数の計算法が、そのまま使える。すなわち

$$\left. \begin{aligned} \frac{n}{2}\bar{b}_r &= T_r(x_1')F_3^* + T_r(x_3')F_7^* + \cdots \\ &\quad + T_r(x'_{\frac{n}{2}-1})F_{n-1}^* \\ r &= 0, 4, 8, \dots, n-4 \end{aligned} \right\} \quad (17)$$

$$\left. \begin{aligned} \frac{n}{2}\bar{b}_r &= T_r(x_1')F_1^* + T_r(x_3')F_5^* + \cdots \\ &\quad + T_r(x'_{\frac{n}{2}-1})F_{n-3}^* \\ r &= 2, 6, 10, \dots, n-2 \end{aligned} \right\} \quad (18)$$

ただし $F_{4k-1}^* \equiv x'_{2k-1}F_{2k-1} + x'_{n-2k+1}F_{n-2k+1}$

$$F_{4k-3}^* \equiv x'_{2k-1}F_{2k-1} - x'_{n-2k+1}F_{n-2k+1}$$

一方、明らかに $b_{-1} = b_1$ であるから(16)より

$$\left. \begin{aligned} b_{r+1} &= 2\bar{b}_r - b_{r-1} \\ b_1 &= \bar{b}_0, r = 2, 4, \dots, n-2 \end{aligned} \right\} \quad (19)$$

すなわち、求める奇数次の係数が得られた。

$n/4$ 項の係数(14)、(15)、(17)、(18)をまとめて

$$S_{\frac{n}{4}} = \gamma_1 T_r(x_1') + \gamma_2 T_r(x_3') + \cdots + \gamma_{\frac{n}{4}} T_r(x'_{\frac{n}{2}-1})$$

と書き、前節で述べた級数の計算法を、これに適用する。三項漸化式

$$T_r(x'_{2k-3}) - 2x_{2r}' T_r(x'_{2k-1}) + T_r(x'_{2k+1}) = 0$$

と初期条件に関して

$$\begin{aligned} T_r(x_1') &= x_r' \\ -2x_{2r}' T_r(x_1') + T_r(x_3') &= -x_r' \end{aligned}$$

が成り立つことに注意し、(9)、(10)を用いれば

$$\left. \begin{aligned} v_{k-1} - 2x_{2r}' v_k + v_{k+1} - \gamma_k &= 0 \\ v_{\frac{n}{4}+1} &= v_{\frac{n}{4}} = 0 \\ k &= \frac{n}{4}, \frac{n}{4}-1, \dots, 1 \end{aligned} \right\} \quad (20)$$

これより

$$S_{\frac{n}{4}} = x_r'(v_0 - v_1) \quad (21)$$

が得られる。

n 個の係数 $\{b_r\}$ を求めるに必要な演算回数の主要部分は(20)で費やされるので、乗算回数は約 $n^2/4$ である。

4. 逐次近似

n 次の梯形形式から出発して $2n$ 次の梯形形式をつくる。仮定として前者の補間点 $\{x_k\}$ と係数 $\{c_k\}$ は既知とする。

補間点は $x=0$ を中心に x 軸上対称に分布しているので片側だけ記憶すればよい。 $2n$ 次の梯形形式の補間点 $\{x_k'\}$ は次によって求まる。

$$\left. \begin{aligned} x'_{2k} &= x_k, k=0, 1, \dots, \frac{n}{2} \\ x_1' &= \sqrt{\frac{1}{2}(1+x_2')} \\ x'_{2k-1} &= \frac{1}{2x_1'}(x'_{2k} + x'_{2k-2}), k=2, 3, \dots, \frac{n}{2} \end{aligned} \right\} \quad (22)$$

$\{x_k'\}$ と $\{f(x'_{2k-1})\}$ より $n-1$ 次の中点式をつくる方法は前節で述べた。これにより中点式の係数 $\{b_r\}$ が得られる。 $\{b_r\}$ と $\{c_r\}$ より $2n$ 次の梯形形式の係数 c_r' ($r=0, 1, \dots, 2n$) は、(6)によって簡単に求まる。したがって $2n$ を n 、 $\{c_r'\}$ を $\{c_r\}$ 、 $\{x_k'\}$ を $\{x_k\}$ にそれぞれ置き換えて同様な操作を繰り返せば、次数が2のべきの梯形形式の列が得られる。

初期値は $n=2$ で与えることにする。すなわち

$$x_0 = 1, x_1 = 0 \quad (23a)$$

および

Table 1. Chebyshev expansion of the function $(1-xz)/(1-2xz+z^2)$

$z=0.2, \epsilon=5 \times 10^{-9}$			$z=0.5, \epsilon=5 \times 10^{-9}$			$z=0.8, \epsilon=50 \times 10^{-9}$		
n	Coefficients	Error	n	Coefficients	Error	n	Coefficients	Error
0	2.00000 0000	0	0	2.00000 0000	0	0	2.00000 0021	21
1	20000 0000	0	1	50000 0002	2	1	80000 0025	25
2	4000 0000	0	2	25000 0001	1	2	64000 0030	30
3	800 0000	0	3	12500 0002	2	3	51200 0038	38
4	160 0000	0	4	6250 0001	1	4	40960 0044	44
5	32 0000	0	5	3125 0000	0	5	32768 0014	14
6	6 4000	0	6	1562 5000	0	:	:	:
7	1 2800	0	7	781 2500	0	:	:	:
8	2560	0	8	390 6250	0	40	13 2922	1
9	512	0	9	195 3124	1	41	10 6331	7
10	102	0	10	97 6562	1	42	8 5070	1
11	21	1	:	:	:	:	:	:
12	4	0	:	:	:	:	:	:
13	1	0	25	29	1	80	17	1
14	0	0	26	14	1	81	11	3
15	0	0	27	8	1	82	10	1
16	0	0	28	3	1	:	:	:
			29	1	1	:	:	:
			30	1	0	125	17	17
			31	1	1	126	11	11
			32	0	0	127	6	6
						128	4	4

$$\left. \begin{aligned} c_0 &= \frac{1}{2}f(1)+f(0)+\frac{1}{2}f(-1) \\ c_1 &= \frac{1}{2}f(1) - \frac{1}{2}f(-1) \\ c_2 &= \frac{1}{2}f(1)-f(0)+\frac{1}{2}f(-1) \end{aligned} \right\} \quad (23 \text{ b})$$

収束の判定法について述べる。近似式の許される誤差限界を ϵ とする。 $[-1, 1]$ で $f(x)$ が十分滑らかならば n 次の梯形形式の誤差は $|c_{n-1}| + \frac{1}{2}|c_n|$ で評価すれば十分であろう。したがって、その梯形形式が

$$|c_{n-1}| + \frac{1}{2}|c_n| < \epsilon \quad (24)$$

を満たすならば、所要の精度に達したことになる。上式を単に計算を停止させるための規則と解釈するならば $f(x)$ に関する条件はゆるめられる。

演算の種類および必要な演算回数について述べる。

まず梯形形式の次数を $2^1, 2^2, \dots, 2^m$ と増したとき、全体として必要な乗算回数をしらべる。次数が 2^k から 2^{k+1} に移行したときの乗算回数は約 $(2^k)^2/4$ であったから、 $N=2^m$ とおけば

$$\sum_{k=1}^{m-1} \frac{2^{2k}}{4} \simeq \frac{N^2}{12}$$

となる。その外、平方根の計算回数が $\log_2 N - 1$ と $f(x)$ の函数値の計算回数が $N+1$ である。

丸め誤差の“不安定現象”は起こらない。計算例を以下に示す。

例題. チェビシェフ多項式の母函数

$$\begin{aligned} f(x) &= \frac{1-xz}{1-2xz+z^2} \\ &= \sum_{n=0}^{\infty} z^n T_n(x), \quad |z| < 1 \end{aligned}$$

を補間法によってチェビシェフ展開した (Table 1.)。演算桁数は指数部 2 桁、仮数部 10 桁、 ϵ は収束を判定するための定数。

$z=0.8$ の場合だけは誤差が大きいため説明を加える。例題の函数 $f(x)$ は、 $z>0$ のとき $[-1, 1]$ で単調増加、また $f(x) = (1-xz)/(1-2xz+z^2)$ において、 $x=1, z=0.8$ とすれば分母は 0.04 である。したがって x が 1 の近傍のとき、分子 $1-xz$ の計算誤差の 25 (1/0.04) 倍が $f(x)$ の計算誤差となる。これが他の二つの場合と違って展開係数 $\{c_n\}$ の誤差を大きくする原因となっている。なお c_{125} の近似値は 0.769×10^{-12} であるから見掛け上得られた末尾の係数 c_n ($n=125, \dots, 128$) は完全に計算誤差だけである。係数 c_{80}, c_{81} が、すでに $\epsilon=50 \times 10^{-9}$ 以下であるから、80 項までとれば、所要の精度にほぼ達したことになるが、 n は 2 のべき乗の値しかとれないから c_n ($n=0, 1, \dots, 128$) まで機械的に計算した。

5. おわりに

函数 $f(x)$ を一旦チェビシェフ展開すると $f(x)$ の

微分、積分は容易である。Clenshaw は補間点を倍加しながら $f(x)$ をチェビシェフ展開し、 $f(x)$ の不定積分を所要の精度で求める方法を発表している²⁾。この際、補間点における $f(x)$ の函数値を無駄なく利用することを強調している。乗算回数の節約についてはふれていない。他方、次数 n が 2^m の複素フーリエ展開係数を乗算（複素数の）回数 $n \log_2 n$ で求める方法が発表されている³⁾。

われわれは $n=2^m$ 次のチェビシェフ展開係数を約 $n^2/12$ 回の乗算で求めたが、計算法の“簡潔さ”を犠牲にせずに、乗算回数をさらに減らすことは残された課題である。

参考文献

- 1) Cooper, G.J.: The Evaluation of the Coefficients in a Chebyshev Expansion. *The Computer Journal* **10**, pp. 94~100, 1967.
- 2) Clenshaw, C.W. and Curtis, A.R.: A Method for Numerical Integration on an Automatic Computer. *Numerische Mathematik* **2**, pp. 197~205, 1960.
- 3) Cooley, J.W. and Tukey, J.W.: An Algorithm for the Machine Calculation of Complex Fourier Series. *Mathematics of Computation* **19**, pp. 297~301, 1965.
- 4) 鳥居達生, 牧之内三郎: チェビシェフ補間多項式による函数の逐次近似, 情報処理学会講演予稿集, 昭和 42.

(昭和 42 年 12 月 27 日受付)